〔書評〕

小島毅『宋學の形成と展開』

末木恭彦

一、

東アジアの近世[1]を語るに、朱子學[2]を抜きにすることはできない。また、我々東アジアの人々は近世を通過することにより今ある。一人の人が困難に面して新しい事態へ踏み出すとき、過去を振り返り、そこから活力を得るものである。一人の人は、また、同時に過去に束縛されてもいる。その過去は、個人の經驗ではなく、共同體の經驗でもある。何故なら、過去は言葉を介して現在を縛るからである。言語は共同體があって初めて存在し得る。從って、言葉を介する以上、共同體が關ってくる。人は、過去に束縛され、同時に過去から活力を得るという二重性[3]がある。ここに、過去を振り返るべき二重の理由がある。過去に於いて重大な事件であった朱子學は、過去を振り返る際に缺くべからざる問題である。

二、

朱子學は、我々日本人を含めて東アジアの人々にとって忘れてはならない問題である。[4] しかし、他の東アジア諸國は措くとして、日本にあっては朱子學が忘れ去られていると言っても過言ではない。例えば、教育制度の中で朱子學はどう扱われているであろうか。中等教育にあっては、僅かに歴史や倫理という科目に朱子學という用語が出るに止まると言ってよいのではないだろうか。そこに數行に渉る解説が與えられるならよいほうであろう。[5] 大學教育に於いても、一般教育が弱體化した現在、中國思想を專門に學ぶ極一部の學生しか朱子學に接することは無いであろう。教育制度に頼らず、獨學で朱子學を知ろうとするとどうであろうか。手頃な朱子學入門書が無いのが實態である。朱子學入門書として手頃な書の紹介を依頼されるとき、從來私は次の一冊しか擧げることができなかった。[6] それは、

島田虔次『朱子學と陽明學』（岩波新書　一九六七年）

である。この書が優れた入門書であることは否定できない。だが、この書が世に問われてから既に三分の一世紀が經た。島田氏も既に天壽を全うされている。一世代前の書であると思わざるを得ない箇所も多々ある。現在の我々の時點・地點から書かれた朱子學入門書が欲しい、それは朱子學の研究者であり、教員でもある私の切なる思いであった。

三、

我々の時點・地點からの朱子學入門書が欲しい、この渇きを癒す書物がここに現れた。それがここに取り

上げた小島毅『朱子學の形成と展開』（創文社　一九九九年）である。中國學藝叢書の一冊として出版された。この「渇きを癒す書である」という語が、本書に對する私の第一の評價である。

四、

私の前記の評價を證するために本書の概要を記しておく。餘計な議論より、目次を掲げるほうがその概略は見渡せるであろう。從って、ここには目次を掲げ、簡單な説明を補うことにする。本書の目次は以下の通りである。

はしがき

Ⅰ　天

一　天譴論／二　郊祀論／三　天理による統合／四　朱熹による展開／五　天譴論の再現／六　郊祀論の再現

Ⅱ　性

一　北宋の性説／二　朱熹の定論／三　心身情性／四　無善無悪／五　朱陸の異同／六　非難と調停

Ⅲ　道

一　主題の構成／二　理学の開山／三　虚像の成立／四　従祀の昇降／五　唐宋の変革／六　道統の後継

Ⅳ　教

一　聖人の教え／二　礼学の意義／三　冬官の補亡／四　教化の職官／五　家礼と郷礼／六　漢学と

宋学
参考文献
あとがき
年　表
索　引

この目次を見れば、本書の關心の一つの中心が朱熹にあることが見て取れる。Ⅰ、Ⅱとも、朱熹について專ら述べる節を設ける。Ⅲ、Ⅳには朱熹の名は擧げられない。だが、理學は現代中國で程朱學を呼ぶに多用される固有名詞である。Ⅳで問題にされる家禮は『朱子家禮』である。Ⅲ、Ⅳも朱熹に比重を置く節を設ける。また、題目に姓名そろって出る人名は朱熹だけである。朱熹が特別扱いされていることが分かる。

しかし、本書が扱うのは、朱熹一人ではない。その視野には、唐宋變革期から清代初めまで入っている。唐宋變革期はⅢ—5の題目に窺われる。清代について言えば、Ⅳ—六に言う漢學・宋學は清代學術に於けるこの二つの用語が問題となっている。

唐宋變革期から清初に至る思想の變化を朱熹を一つの焦點として、朱熹の思想の形成とその後學に於ける變容を描きだしていると言うことができる。後學は、朱熹を承けて自分達の學問を展開している。その中には、朱熹の後繼を自稱する人々もいる。狹い意味での朱子學である。朱熹の後學を問題にするとき、この朱子學が第一に問題となる。この意味での朱子學も本書に大きな位置を占めている。

本書が朱子學について語る書であること、以上の説明で分かるであろう。

五、

本書は、朱子學について語る書である。しかし、その語りは特色を持つ。その特徴のいくつかを指摘しておく。

第一に、朱熹一人の解説ではない。朱熹の先驅・後學を含めて問題としている。もっとも、この點だけで言えば、思想史の著述として極く普通である。中國思想史は、通常、唐の韓愈に宋代學術の端緒を求め、北宋の周敦頤・張載・程顥・程頤の四人を先驅として朱熹の學術の成立を説く。また、朱熹門人に始まる朱熹以降を、特に明初の朱子學の實踐化などに重點を置いて描く。この様な通常の思想史と比較するとき、本書の次なる特色が見えてくる。

第二に、本書は思想家の列傳體を排している。從來の思想史は、殆ど重要な思想家を時間列に沿って並べ、その思想を概述してゆく形をとる。本書は全く異なる。目次を見れば一目瞭然であろう。天・性・道・教と四つの問題系列に沿って、それをめぐる言論、行動の展開を時系列を追って記述している。一つの系列として思想史を物語るのではなく、並列する問題についての並列する系列として、學問・思想の展開を描きだしている。また、言説だけでなく、祭祀や制度などに目配りし、そこに思想の表現を見ている。この記述の形態の新しさを、本書の特色の一つに擧げてよいであろう。

第三に、從來の朱子學の説明からは排除される人々の名が本書では朱熹の思想の成立・展開に深く關るとして擧げられている。例えば、北宋の王安石であり、明代の王守仁（陽明）である。

王安石については、その思想的立場が程頤と極めて近いことが指摘されている。他方で程頤と朱熹の間に

横たわる溝へ注意が促されている。王守仁については、朱子學展開の一變形と位置付けられている。

この指摘は、從來の思想史の通説に異を唱えている。通説では、程頤から朱熹への連續が強調され、王安石は朱熹によって斥けられた人物として把えられてきた。又、王守仁は、朱子學の行き詰まりを打破して新しい學説を提示したとされている。即ち、反朱子學の一巨峰として王守仁は把えられてきた。小島は、これらの通説と異なる見解を説得力を持って語る。ここにも本書の特色の一つを見ることができる。

六、

本書の特色として次の三つの點を擧げた。

（一）朱子學を唐宋から清初までの時間の中に把えている。

（二）四つの問題についての言説・行動を並列させて、朱子學（宋學）の成立と展開を描きだしている。方法的な新しさが見られる。

（三）從來の思想史の通説を覆す見解を示している。學説が新鮮である。

このうち第一の點には既に考察を加えてある。ここでは、残りの二つの點について考察を加えることにする。考察の便から（三）を先にし、（二）を後に回す。

六・一

（三）に於いて學説の新しさを指摘した。しかし、例として擧げた點について言えば、必ずしも小島が初めて唱えた譯ではない。例えば、朱子學と陽明學は通底しており、陽明學は朱子學の路線を原理主義化している、この様な見解は從來もあった。[7] また、王安石と程頤の近さ、程頤と朱熹の間のズレも堅實な文獻研究

の上に指摘されている。[8]

六・二

（二）の點についても、必ずしも小島が先驅であるとは言えない。小島の方法は史的システム論に通底している。史的システム論は、過去の出來事を靜態的な事象としてではなく、動的な出來事として把える。その為に、一つの事象を複數の系の絡み合いとして理解してゆく。この史的システム論の特徴は本書に見出すことができる。既に指摘した通り、單一の系列として記述するのではなく、天・性・道・教の四つの系列から宋學の成立と展開を描きだしている。また、動態的な把握への志向は、「成立と展開」という書が示している。しかし、小島は史的システム論との關係は何も語っていない。私が「通底する」と言うに止める所以である。

史的システム論について言えば、例えば上田信が既に自覺的に方法として提起している。[9] 或いは、その東アジア思想史への適用は、江戸思想史に於いて子安宣邦が既に試みている。[10] 方法的にも必ずしも小島は先驅とは言い得ない。

六・三、

小島の本書の特色はどこにあるのであろうか。どう言えば妥當なのであろうか。前述の考察を踏まえて、次の様に言えるのではないだろうか――

方法的に小島は先驅とは言えない。しかし、問題を朱子學の展開、或いは宋明思想史に限れば、この方法を用いた先人はいない。また、（二）に指摘した見解も、廣い讀者層を想定する書物に根據をも明確にして論じたのは、小島が最初である。最新の方法と成果を廣い讀者層に提示した。この點に本書が他にない優れ

たところを見ることができる。

尚、小島氏の名譽のために言えば、本書の方法も見解も、小島自身によって考え抜かれたものである。決して、他者の議論を借りてきている譯ではない。この點から言えば、彼の採用した方法、彼の提示する見解に獨自に有效性・確實性を證している――この様な評價も可能である。

七、

本書は、無條件に朱子學入門書の新たなる標準と言い得るのであろうか。もし、私が斯く問われるならば、躊躇せざるを得ない。如何に優れた書でも、少しの瑕疵を免れることは難しい。小島の本書もその例外ではない。その瑕疵を論(あげつら)うことは、本書の評價を動かすものではない。[11] しかし、本書には瑕疵として見逃し得ない問題の存在も私は感じる。それは、本書に對する小島の自己認識である。

小島が本書に描く朱子學像は新鮮である。この點は既に指摘した。その見解は從來の思想史の常識を覆している。この轉換を、小島自身は、思想の偏向を被った虚像から、正確な歴史認識への轉換と自覺している。[12] この自己認識に對して、疑問を禁じ得ないのである。――小島自身の見解が虚像でないことは如何にして保障されるのであろうか、と。

八、

小島は、歴史認識と思想を對立させ、歴史認識は思想を排除することによって成り立つと考えているようである。ここに、大きな疑問が避けられない。

「『歴史認識』も『思想』の一種なのではないのか」

我々は、自らの思想を離れることはできるのであろうか。例えば、自然科學は思想から中立と考えられ易い。その自然科學も、思考枠（パラダイム）があり、その枠に沿って自然現象を解釋している。思考枠は、自然科學の成果として生まれるものではなく、寧ろ哲學的・思想的な産物である。これは、近年の科學史の成果である。これを考えれば、「歴史認識」も思想がはたらいていると考えて間違いないであろう。思想が常にはたらいていること、ここに思想を問う學問が成立する根據もあるであろう。[13]

九、

我々は思想を離れることができない。だからといって、思想に任せて好き勝手を言ってよい譯ではない。過去の出來事は、その解釋は異なっても、共有しなくてはならない認識も存在する。「事實」と喚ばれる領域である。しかし、「事實」も認識である。どの點で通常の認識と區別されるのであろうか。「事實」には、認識に自覺的な制約を加える必要がある。多くの人の間に共有しうる認識であるべき留意がなされて、初めて「事實」の領域に認識を進めることができる。[14]

右に述べたところを踏まえて、小島の「歴史認識」を考えるとどうであろうか。私は、本書の中に方法についての説明を見出し得ない。勿論、このことは、小島が方法に無自覺であることを意味しない。小島は、「虚像」の再生産を拒む。また、「虚像」が如何にして生まれたか、生まれるかを指摘している。[15] 否定的な形で方法に言及している。そして、問題はここにある。「虚像の再生産」に對して、いとも簡單に「歴史認識」を對置している。「歴史認識」が如何にして可能であるのか、この點については一言も語っていない。

「本書の認識は如何にして『歴史認識』であることを保障されているのであろうか」

「本書に述べる諸點も、小島の思想に基づいた虚像ではないのか」

小島は、これらの問いに對して如何に答えるのであろうか。

十、

小島に對し、あと一つ軽視できない疑問がある。本書の題目は『宋學の形成と展開』である。では、「宋學」とは何を指すのであろうか。本書の扱っている内容から言えば、朱子學を中心とした宋から清にかけての儒學である。これを指して「宋學」と言うのは、現在の日本の通説からはやや外れるものの、從來の「宋學」理解の延長上で、少し擴張して用いていると言える。問題は、その先にある。「宋學」の語を、小島は「『漢學』者たちが使う、廣義の用法と理解していただきたい」（viii頁）と述べている。これが讀者に混亂をもたらすのではないのか。少なくとも、私は彼の言う「宋學」に理解が混亂した。

ここで小島が言う「漢學」は、清代の學者が自らの立場として稱えた漢學である。「宋學」は、この「漢學」と對になる概念として清代「漢學」者が特定した。即ち、「宋學」は清代になって初めて成立した概念である。この點は、小島が本書の中に指摘している（Ⅳ 教 六 漢學と宋學）。從って、「宋學」の成立とは清代思想の問題である。ここに、本書に述べるところと「宋學」という用語に乖離が生じている。この乖離が讀者に（少なくとも私に）混亂をもたらすのである。

小島は、固より「漢學者」ではないであろう。從って、小島の用いる「宋學」は決して「漢學者」の用語ではない。「漢學者」の用語でないこと、その用語と繋がりを持たないことである。小島は、「漢學者」に

借りて用いたのである。かく言明していたならば、混亂は起きない。

この點は、單なる言葉遣いの問題なのかもしれない。しかし、それだけに終わらない問題をも孕むのではないだろうか。漢學が宋學という概念を成立させた。そこには漢學者の立場が貫かれている。では、小島は如何なる立場から「宋學」を把えているのであろうか。少なくとも、漢學の立場から生じた「宋學」像は虚像であると斷じていた。それでは、それに代わる根據を「宋學」という用語に與えているのであろうか。小島は、「歴史認識」と言いたいのかもしれない。しかし、「歴史認識」には疑問がつきまとう。

この様に見てくると、本書は問題の限定への仕方、その扱い、根據が甚だ曖昧である。本書の論述が朱子學（宋學）についての唯一の論述の形なのか、異なる宋學像の提示を排除し得るのか、[16] この點に本書は弱さがある。本書を讀む限り、本書の優越性を主張する強さは私には認められない。

十一、

本書が朱子學入門書の新しい標準となり得るのか、私は躊躇すると先に述べた。その躊躇する理由は以上に述べた通りである。勿論、この躊躇は本書の價値の否定ではない。今、本書を定論とすることができないと言うのみである。新しい標準の候補であることは否定しない。否、寧ろ、有力な候補であると強調してよいと、私は考えている。

更に、東アジア近世文化に朱子學がもつ大きな影響力から言えば、本書は東アジアの思想史・文化史理解にも看過し得ない問題を提起している。

今後の東アジアの文化・思想の研究に當たって、本書は避けて通れぬ書の一つとなることは確かであろう。

また、それゆえに、本書の細微に立ち入っての検討も我々に要請されているのかもしれない。

尚、本稿に於いて敬稱は一切略した。名を擧げた諸氏には海容されることを乞う。（了）

註

（1）中國で言えば宋以降清代迄、朝鮮半島で言えば李朝時代、日本で言えば江戸時代を指してこの語を用いる。

（2）本稿では、朱子學を次の範圍を示す言葉として用いる。即ち、十二世紀の學者朱熹の言行と、その先驅、及びその後繼の言行。

（3）この件の論述は、新宮一成『夢分析』（岩波新書　二〇〇〇年）を參照した。

（4）當然のことであるが、東アジアは世界の中に孤立していた譯ではない。從って、世界史的に見ても忘れてはならない問題である。

（5）手近にあった高等學校の倫理の教科書（湯淺泰雄他編『倫理』東京學習出版社　平成十二年）では、朱子學は獨立した項目として扱われず、僅かに日本儒學の項の註として述べられているにとどまる。

（6）勿論、これ以外にも高く評價できる朱子學の手引書は存在する。例えば、

荒木見悟他『朱子・王陽明』（『世界の名著』續4）中央公論社　一九七四年

三浦國雄『朱子』（『人類の知的遺産』19）講談社　一九七九年

等。前者は、翻譯を本體とする。原典による朱子學概論として秀でる。後者は、評傳・思想の概説・基本資料のアンソロジー・後世への影響と、一冊に豐富な内容を含む。ただし、前者は原典そのものが必ずしも分かり易いとは言えない。また、後者は現在入手が困難である。手頃な入門書とは言い難い。

尚、朱熹個人の評傳や專門書の中にも秀でた書がある。だが、朱子學入門書とは言い得ないので、ここには觸れない。

(7) この様な主張をする最近の例としては、次の論文を擧げることができる。

吉田公平「王陽明の朱子學批判」(『藤樹研究』一四六、『陽明學が問いかけるもの』〈研文出版社　二〇〇〇年〉に收録)

(8) 例えば、近藤正則『程伊川の『孟子』受容と衍義』(汲古書院　一九九六年)。

(9) 上田信『傳統中國――〈盆地〉〈宗教〉に見る明清時代』(講談社　一九九五年)

尚、本稿の史的システム論に關する記述はすべてこの上田書を參照した。

(10) 子安の江戸思想についての著作は少なくない。但し、子安の研究は、初期と現在ではかなり異なる。子安が史的システム論に近い立場をとった最初の著作は次の書であるだろう。

子安宣邦『「事件」としての徂徠學』(青土社　一九九〇年)

上田が註(9)所掲の書中に指摘しているが、「事件」という用語は史的システム論の重要な用語である。

(11) 瑕疵を論うことが無意味であるというのではない。或いは、具體的な問題の理解の妥當性を問うほうが認識の深化を果たし、生産的であるかもしれない。

(12) 次の様な言葉に、小島の立場は窺える。現代新儒家を批判して言う。

以下で問題としたいのは、新儒家が抱く宋明思想のイメージの危うさについてである。それは、朱熹や王守仁がもっていた孔子・孟子のイメージが歴史的に形成され、彼ら自身によって擴大再生産された虚像であったのと同じ意味で、彼らの朱熹・王守仁像も後世作られた虚像にすぎないと考えられるからである。(二四三頁)

この發言に、虚像の再生産への批判が讀み取れる。また、清代の「宋學」像を論じて、次の様にも言っている。

繰り返しになるが、自分の思想として受けとめる場合、そうした理解はあって當然である。朱熹にしてからが、そうやって孔孟の學のイメージを作っていったのだから。ただ、歴史認識の問題として見た場合、このズレはしっかりと把握されるべきであろう。（二四七頁）

ここから、思想に對して「歴史認識」を置き、「歴史認識」を探求する立場が窺える。

(13) 歴史的事象の認識に思想が媒介することは、既にマックス・ウェーバーによって指摘されている。

理念型は、ひとつの思想像であって、この思想像は、そのまま歴史的實在であるのでもなければ、まして「本來の」實在であるわけでもなく、いわんや實在が類例として編入されるべき、ひとつの圖式として役立つものでもない。（富永祐二・立野保男譯、折原浩補譯『社會科學と社會政策にかかわる認識の「客觀性」』〈岩波文庫　一九九八年〉一一九頁）

(14) 「事實」の認識は、從って甚だしく困難がつきまとう。このことは、例えば一九三七年に日本軍の行動により南京で多數の中國人が死に追いやられたという事件が必ずしも日本人の多數に認められていない一事からも推測されよう。

(15) 註（12）を參照。

(16) 理論（學説）に真の「根據」は求められないのかもしれない。また、複數の理解が並存し得るという立場もあり得る。從って、私がここに指摘した點が直ちに小島の弱點とは言えない。ただ、その様な立場は必ずしも容易に讀者に受け容れられるかも疑問である。やはり、小島は自分の立場・方法に十分説明を加えてほしかった。

尚、本書に述べるところが、必ずしも、讀者に受け容れ易くないこと、小島は自覺していると思われる。小島

自ら「本書は偏癖の書である」（ⅳ頁）と斷っている。

（二〇〇〇年十二月二十五日稿）